

カイロ・エジプト博物館所蔵のハティアイ墓出土土器について

高橋 寿光

The Pottery from the Tomb of Hatiay in the Egyptian Museum, Cairo

Kazumitsu TAKAHASHI

1896 年、エジプト、ルクソール西岸において G. ダレッシー (Daressy) が未盗掘の状態で見つけた新王国時代第 18 王朝末のハティアイの墓から、木棺などと共に 6 個体の壺形土器と 3 個体の蓋が出土した。これらの土器は新王国時代の画期であるアマルナ時代直前の状況を示す資料として学史上重要であるが、これまで未発表であった。

器形や装飾などから、ハティアイ墓の出土土器は石製およびガラス製容器を模倣した彩文土器と考えられる。このような彩文土器は第 18 王朝後半のルクソール西岸岩窟墓の副葬品に特有のものであり、岩窟墓の壁画を描いた絵師によって装飾された可能性が高く、当時のルクソール西岸の絵師の一端を解き明かす有効な資料として期待される。

キーワード：古代エジプト、シェイク・アブド・アル＝クルナ、ハティアイ、石製およびガラス製容器を模倣した彩文土器

The tomb of Hatiay which is situated at Sheikh Abd el-Qurna on the west bank of Luxor was discovered intact by George Daressy in 1896. Hatiay was a high official who has the title “Scribe, Overseer of the granary in the Temple of the Aten”, and Daressy dated him from the end of the reign of Amenhotep III to the early reign of Amenhotep IV on the basis of textual evidence. Daressy reported six vessels and three lids which were found from the north side of the coffin of Hatiay’s wife, Henut-wedjebu, together with the coffins of Hatiay, Siamun, and Huy. Although these vessels are now on display in room 12 on the upper floor of the Egyptian museum, Cairo, they had never been properly studied.

This note aims to introduce these important painted pottery vessels which, I believe, provide significant data concerning the manufacturing organization of painted pottery in Thebes during the New Kingdom.

The pottery vessels from the tomb of Hatiay imitate stone or glass vessels. These types of vessels are characteristic of Theban funerary assemblages in the late Eighteenth Dynasty. The distribution of the stone/glass imitation vessels is restricted to the Theban tombs. The Marl A₄ fabrics in the Vienna System are often used for this type of vessel and their forms are relatively standardized. Therefore it is suggested that they were manufactured locally and specially for funerary purpose.

The examples from the tomb of Hatiay also used Marl A₄ fabric and their forms are bag-shaped jars. Their decorative schemes have a white background with black dots, a white background with red wavy-line, green-coated and blue background with yellow lines. These colors and motifs probably represent the breccia, alabaster, green marble and glass vessels respectively. Hatiay’s name and title, such as “*3sṛ sš Ḥ3tṯ3y*” (the god Osiris, scribe, Hatiay), are inscribed with black ink within the black bordered panel on their bodies.

The pottery vessels imitating stone or glass vessels are thought to be used as funerary items or for magical use. They could also shed light on the aspects of artisan’s painting techniques in the Luxor area since connections are identified between the stone vessels decorated on the tomb wall paintings and the decorative style on the pottery vessels imitating stone or glass vessels.

Key-words: Ancient Egypt, Sheikh Abd al-Qurna, Hatiay, Pottery vessel imitating stone or glass vessel

はじめに

1896年、エジプト、ルクソール西岸において、G. ダレッシー (Daressy) は新王国時代第18王朝末のハティアイの墓を未盗掘の状態で発見した (Daressy 1901)。墓からは6個体の壺形土器と3個体の蓋が出土しており、現在、カイロのエジプト博物館2階の第12号室に展示されている。新王国時代の画期であるアマルナ時代直前の状況を知る資料として、また土器の年代の指標としても学史上重要であるが、発掘以来100年以上が経過した現在でも未発表のままであった。筆者は2006年にカイロ・エジプト博物館にてルクソール西岸から出土した土器の資料調査を行ったが、本稿ではその中でもハティアイの墓から出土した土器について報告を行ってみたい¹⁾。

ハティアイ墓

ハティアイの墓はルクソール西岸のシェイク・アブド・アル＝クルナ地区に位置する (図1)。墓の場所については「リンドがパピルスを発見した墓²⁾ から北に約10m、80号墓の下に位置する内壁の北端」とダレッシーが記述しているものの、墓の正確な位置は現在不明である。報告によれば、同地区の東側丘陵斜面に部屋が粗く穿たれているのみで、内部には装飾、碑文などはない。入口は日乾レンガで封鎖され、内部の部屋には4つの木棺が納められていた (Daressy 1901: 1-2; 図2)。

第1の木棺には“*sš imy-r šnwt m t3 hwt p3 Itn*”「書記、アテン神殿の穀物庫の長」などの称号と“*H3ti3y*”「ハティアイ」の名前が記されている³⁾。ダレッシーは第18王朝末、アクエンアテン王の宗教改革の時期 (所謂アマルナ時代) によく見られるアテン神の名前が見られるものの、銘文帯がそれまでの時代と比べ変化していないこと、アテン神以外の神々が見られることなどから、ハティアイを新王国時代第18王朝のアメンヘテプ3世治世終わりからアメンヘテプ4世治世初期に年代付けている。2番目の木棺には“*šm'yt n Imn nbt pr Hnt-wdb*”「アメンの歌い手、家の女主人、ヘヌウトウェジェブ」⁴⁾、3番目の木棺には“*nbt pr S3-imn*”「家の女主人、サアメン」、そしてこれらの木棺の上に“*nbt pr Hwyt*”「家の女主人、フイ」の第4の木棺が位置する。家族関係を証明するものは無いものの、ヘヌウトウェジェブの木棺はハティアイと同じ形式ということから、彼の妻ではないかと想定されている。また、他の2人の女性に関しては証拠が無く、家族関係は不明としている (Daressy 1901: 2)。

土器はこれらの木棺のうちのヘヌウトウェジェブの木棺と北壁の間から出土したものである (Daressy 1901: 12)⁵⁾。

ハティアイ墓出土土器

以下にそれぞれの土器の詳細について述べていきたい。器形分類に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基

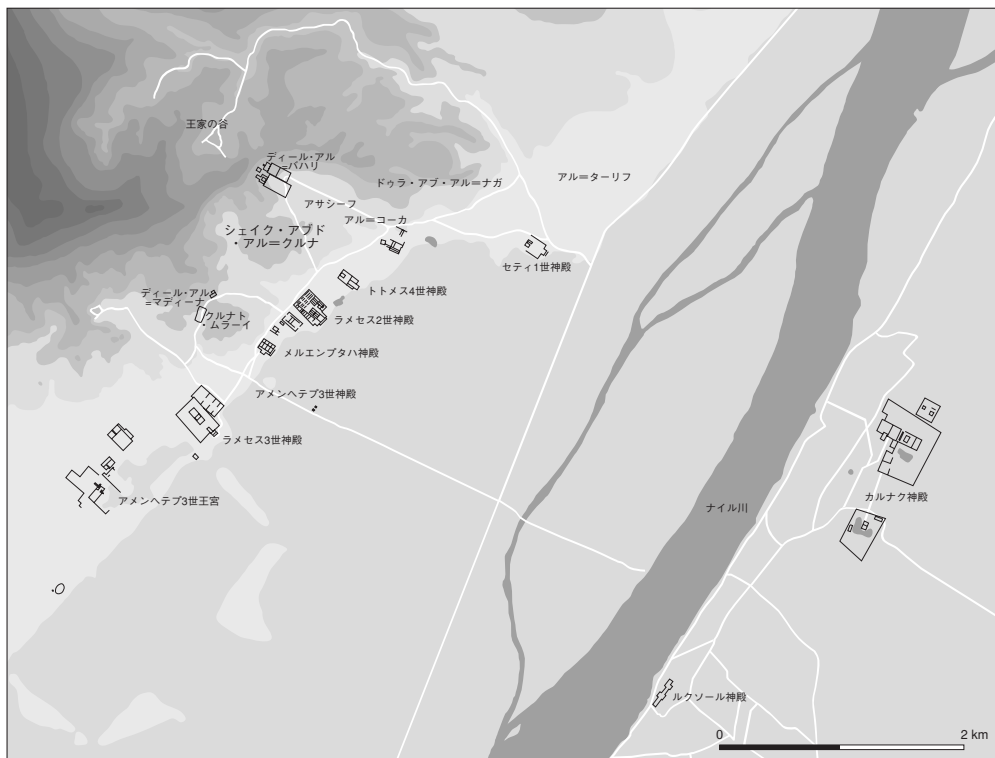


図1 ルクソール地図 (Baines and Malek 1980: 85 を基に作成)

づいた器形分類 (Aston and Aston 2001: 53-54) と形態に基づく器形分類 (Holthoer 1977) を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した。

ハティアイの墓から出土した土器の胎土に関しては 10 倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システム (Vienna system) を参照し、記述を行った (Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130-132)。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。

観察の結果、胎土は全て同一であり、細かな砂がやや多く、細かいスサ、石灰岩が僅かに含まれている。色調は茶色 (5YR 6/6) を呈す。これらの特徴からウィーン・システムによる分類では Marl A₄ にあたると判断される。

土器はいずれも内外面共に横方向の刷毛撫でにより形が

整えられており、非常に丁寧に作られている。また、全ての土器が下地の白色スリップの上に装飾が施されており、顔料の様子から焼成後に彩色が施されたと判断される。現在では黄色に変色しているものの、表面には樹脂⁶⁾が塗布されている。

1. 壺形土器 (S.R.223, J.E.31401bis; 図 3-1, 4-1)⁷⁾

高さ 15.2cm、口径 10cm、最大径 13.85cm である。口縁は折り返し、やや外に拡張して作られており、頸部は太く、胴部中央が張り出す壺形土器である。底部は若干丸みをおびる。

外面には黒色で点文様が施されており、これは角礫製の容器を表現したものと考えられる。胴部には、黒色で縁取られたパネルの中に“*im3hy (hr) 3sir H3ti3y*”「オシリス神、祝福されし者、ハティアイ」が黒色で記されている。

2. 壺形土器 (S.R.230, J.E.31397; 図 3-2, 4-2)

高さ 14.35cm、口径 10.6cm、最大径 13.6cm である。口縁は折り返し、やや外に拡張して作られており、頸部は太い。肩部は張り出しが弱く、胴部下部が張り出す壺形土器である。底部は若干丸みを帯びる。

外面には赤色で波線の文様が施されており、これはアラバスター製容器を表現したものと考えられる。胴部には黒色で縁取られたパネルの中に“*im3hy (hr) 3sir H3ti3y*”「オシリス神、祝福されし者、ハティアイ」が黒色で記されている。

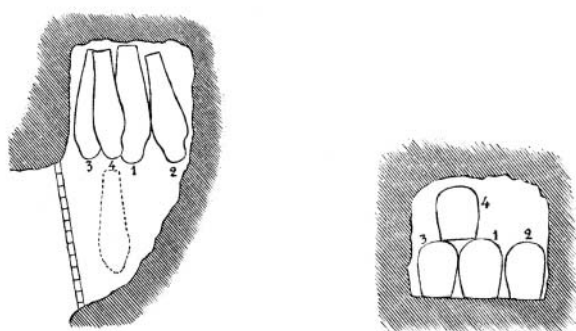


図2 ハティアイ墓平面図および断面図 (Daressy 1901: fig.1)

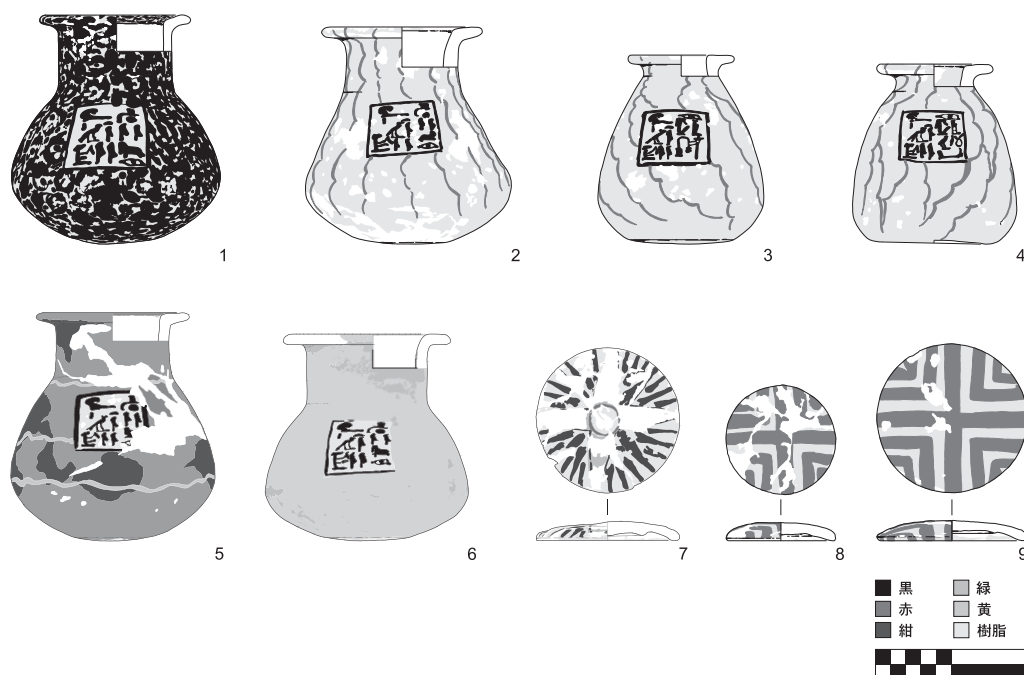


図3 ハティアイ墓出土土器

3. 壺形土器 (S.R.251, J.E.31399; 図 3-3, 4-3)

高さ 11.8cm、口径 7.7cm、最大径 10.9cm である。口縁は折り返し、やや外に拡張して作られており、頸部は太く短い。胴部下部が張り出す壺形土器である。底部は若干内側にへこむ。

外面には赤色で波線の文様が施されており、これはアラバスターを表現したものと考えられる。胴部には黒色で縁取られたパネルの中に黒色で“3sir sš H3ti3y”「オシリス神、書記、ハティアイ」が記されている。その他、口縁部には蓋の痕が残る。

4. 壺形土器 (S.R.244, J.E.31400; 図 3-4, 4-4)

高さ 12.45cm、口径 7.1cm、最大径 11cm である。口縁は折り返し、やや外に拡張して作られており、頸部は短い。胴部下部が張り出す壺形土器である。底部は若干丸みを帯びる。

外面には赤色で波線の文様が施されており、これはアラバスター製容器を表現したものと考えられる。胴部には黒色で縁取られたパネルの中に黒色で“3sir rwd H3ti3y”「オシリス神、監督官、ハティアイ」が記されている。

5. 壺形土器 (S.R.245, J.E.31401bis; 図 3-5, 4-5)

高さ 15.05cm、口径 10.1cm、最大径 13.5cm である。口縁は折り返し、やや外に拡張して作られており、頸部は太

い。胴部下部が張り出す壺形土器である。底部は若干丸みを帯びる。

外面には紺色の背景が塗られ、更にその上に黄色の波線の装飾がある。この装飾は、同時代のガラス製容器に見られる装飾と類似しており、ガラス製容器を表現したものと考えられる。胴部には黒色で縁取られたパネルの中に黒色で“im3hy (hr) 3sir H3ti3y”「オシリス神、祝福されし者、ハティアイ」が記されている。

6. 壺形土器 (S.R.250, J.E.31398; 図 3-6, 4-6)

高さ 13.4cm、口径 11.1cm、最大径 13.5cm である。口縁は折り返し、やや外に拡張して作られており、頸部は太い。胴部下部が張り出す壺形土器である。底部は若干丸みを帯びる。

外面は緑色で塗られており、これは緑色の大理石製容器を表現したものと考えられる。胴部には黒色で縁取られたパネルの中に黒色で“im3hy (hr) 3sir H3ti3y”「オシリス神、祝福されし者、ハティアイ」が記されている。

7. 蓋 (S.R.230, J.E.31397; 図 3-7, 4-7)

直径 9.4cm、厚さ 0.9cm である。裏側には突起が付けられている。表には赤と紺色でロータスの花が描かれている⁸⁾。蓋の裏側には樹脂が厚く塗られており、また容器の口縁部に蓋の痕跡が見られることから、蓋の固定のために樹脂が

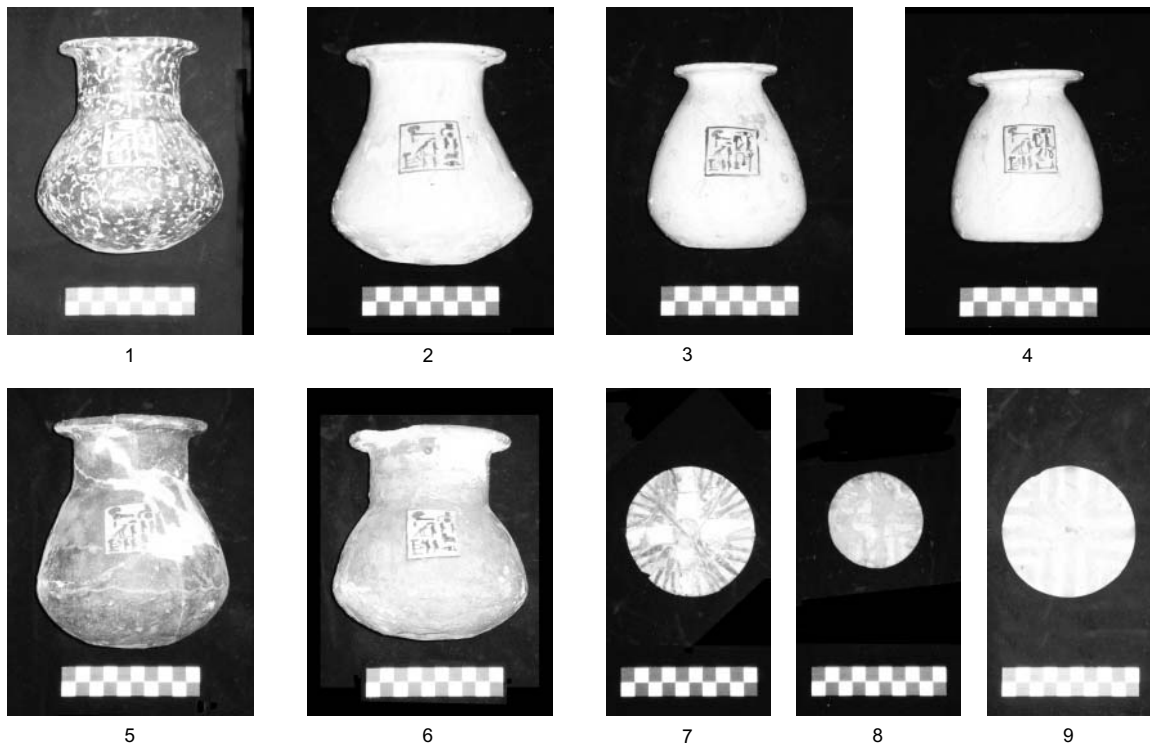


図4 ハティアイ墓出土土器写真

用いられたと考えられる。

8. 蓋 (S.R.244, J.E.31400; 図 3-8, 4-8)

直径 7.2cm、厚さ 0.8cm で、裏側の中央には突起がある。表には白色の下地に赤で十字の文様が施されている⁹⁾。前述の蓋と同じく、蓋と容器を固定するために樹脂が用いられている。

9. 蓋 (S.R.245, J.E.31401bis; 図 3-9, 4-9)

直径 10cm、厚さ 0.7cm で、裏側の中央には突起が付けられている。表には赤で十字の文様が施されている。前述の蓋と同じく、蓋と容器を固定するために樹脂が用いられている。

小 結

ハティアイの墓から出土した 6 個体の土器は、器形や装飾などから、石製およびガラス製容器を模倣した彩文土器と考えられる。このような彩文土器は第 18 王朝後半のルクソール西岸岩窟墓の副葬品に特有のものであり、これまでのところ同地域以外での出土例はほとんど知られていない (Rose 2003: 205)¹⁰⁾。

出土例としては、トトメス 4 世時代のチャヌニ墓 (TT74; Brack and Brack 1977: taf.14, 16, 46.a-d, 48.a, 49.a)、ネフェルヘテプ墓 (TT257; Mostafa 1995: taf.XLVIII.146-148)、王家の谷第 28 号墓 (KV28; Aston et al. 2000: nos.30-33)、クヌムメス墓 (TT253; Rose 1996: pls.64.76-78, 66.103-108)、アメンヘテプ墓 (Nr.-127; 早稲田大学エジプト学研究所編 2007: fig.105, no.676) などが挙げられる。主に高官の岩窟墓から出土し、地位の低い人物の墓からは出土していないことから、石製容器やガラス製容器を安価に代用したものではないと考えられている (Bourriau 1981: 117)。

胎土はウィーン・システムにおける Marl A₄ の例がよく知られており (Rose 1996: 170; Bourriau et al. 2005: 59)¹¹⁾、装飾後に色鮮やかさを保つために樹脂が塗布される (Bourriau 1981: 117)。使用される胎土や器形が限られ、分布が墓に集中していることから、これらの土器はルクソール西岸で、地域的に、そして埋葬のためだけに特別に製作された可能性が指摘されている (Rose 1996: 170; 2003: 205)¹²⁾。

石製およびガラス製容器を模倣した彩文土器については、バルダサーリによる論考がある。彩文土器の出土例とルクソール西岸の岩窟墓の壁画に石製容器、ガラス製容器が描かれるのが第 18 王朝後半に限られること、両者ともに下地に白色のプラスターを用い、その上に装飾を施するという類似した技術で描かれていること、そして両者の装飾

が類似していることから、このような彩文土器は陶工によって装飾されたものではなく、ルクソール西岸の岩窟墓の壁画を描いた絵師によって装飾が行われた可能性を指摘している (Baldassari 1981: 149-150)。

ルクソール西岸から出土した石製およびガラス製容器を模倣した彩文土器には、時代や出土場所によって若干の装飾の違いが見られる。これらの彩色がルクソール西岸の岩窟墓の壁画を描いた絵師によって装飾されたとするならば、比較考察を行うことによって、当時のルクソール西岸の絵師について、これまでの壁画自体の研究 (e.g. Kozloff 1990) とは異なる新たな側面から言及することが可能であろう。

このように、これまでルクソール西岸から出土した石製およびガラス製容器を模倣した彩文土器は、当時の埋葬習慣を示す特徴的な土器としてその重要性が指摘されていたが、それだけではなく、当時のルクソール西岸の絵師の一端を解き明かす有効な資料として期待される。

註

- 1) カイロ・エジプト博物館における資料調査は日本学術振興会科学研究費補助金の助成を受けて行われた。調査に際してエジプト考古最高会議長官ザヒ・ハワス博士、カイロ・エジプト博物館館長ワファ・アル＝サディーク博士、吉村作治早稲田大学客員教授に多大なご協力を頂きました。また、本稿を草するにあたり近藤二郎早稲田大学教授、河合望早稲田大学客員准教授、査読の先生には有益なご示唆を頂きました。ここに記して感謝致します。
- 2) A.H.リンド (Rhind) が発見したこの墓も現在位置不明である (Rhind 1862)。
- 3) 現在、カイロ・エジプト博物館 2 階 17 号室に展示されている (J.E.31378)。
- 4) ヘヌウトウエジェブの木棺については Berman 1992: 312-317 に詳しく述べられている。現在、ミズーリ州セントルイスのワシントン大学附属博物館所蔵 (no.2292)。
- 5) ハティアイの墓からはその他にもサアメンの木棺から化粧壺を捧げ持つ人物を象った木製の化粧壺などが出土している (Daressy 1901: 9-10, fig.9; Wiese 2004: 220-223)。
- 6) アシュモレアン博物館所蔵、新王国時代の石製容器の模倣土器の分析では、ウルシ科カイノキ属の樹脂であることが判明している (Serpico 2000: 459)。
- 7) S.R.は「Special Register」、J.E.は「Journal d'Entrée」の略である。
- 8) R. バルダサーリ (Baldassari) はナクト墓 (TT52) などのルクソール西岸の岩窟墓の壁画には容器の上部にロータスの花が描かれていることから、ロータスの花が実際に容器の蓋として用いられており、それを表現した可能性を指摘している (Baldassari 1981: 152-153)。
- 9) こうした十字の装飾は蓋を固定するパピルス紐を表すとされる (Lansing 1941: 141)。
- 10) ルクソール西岸以外では、これまでのところメトロポリタン博物館所蔵の中部エジプト、マッラウィー出土の 1 例が知られるのみである (Bell 1978: pl.IV)。
- 11) その他、Nile B₂ の例も若干ではあるが、報告されている (Bourriau 1981: 117)。

- 12) 石製およびガラス製容器を模倣した装飾は、容器をかたどった木製品にも施されている。同じく第18王朝後半に年代付けられ、ルクソール西岸の副葬品に特有のもので、トトメス4世時代のネブセニイ墓 (TT108; Lansing 1941)、アメンヘテプ3世時代のユウヤとチュウヤの墓 (KV46; Davis 1907: pls.XXVII, XXVIII; Quibell 1908: pls.XX, XXI) などから出土している。

参考文献

- Aston, D. A. and B. G. Aston 2001 The Pottery. In G. T. Martin, J. van Dijk, M. Raven, B. G. Aston, D. A. Aston, E. Strouhal and L. Horáková, *The Tombs of Three Memphite Officials, Ramose, Khay and Pabes*, 50-61. London, The Egypt Exploration Society.
- Aston, D.A. and B.G. Aston, D.P. Ryan 2000 Pottery from Tombs in the Valley of the Kings KV 21, 27, 28, 44, 45 and 60. *Cahiers de la Céramique Égyptienne* 6: 11-38.
- Baines, J. and J. Málek 1980 *Atlas of Ancient Egypt*, Oxford, Phaidon Press Ltd.
- Berman, L. M. 1992 Coffin of the Singer of Amun, Henut-wedjebu. In A. P. Kozloff and B. M. Bryan, *Egypt's Dazzling Sun: AMENHOTEP III AND HIS WORLD*, 312-317. Cleveland, Cleveland Museum of Art.
- Bourriau, J., P. T. Nicholson and P. Rose 2000 Pottery. In P. T. Nicholson and I. Shaw (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, 121-147. Cambridge, Cambridge University Press.
- Baldassari, R. 1981 Proposte di Classificazione e di Interpretazione dei Vasi Imitanti del Regno Nuovo. *Egitto e Vicino Oriente* IV: 143-175.
- Bell, M. 1987 Regional Variation in Polychrome Pottery of the 19th Dynasty. *Cahiers de la Céramique Égyptienne* 1: 49-76.
- Bourriau, J. 1981 *Umm el-Ga'ab: Pottery from the Nile Valley before the Arab Conquest*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Bourriau, J., D. Aston, M. J. Raven and R. V. Walsem 2005 *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-chief of Tutankhamun III: The New Kingdom Pottery*. London, The Egypt Exploration Society.
- Brack, An. and Ar. Brack 1977 *Das Grab des Tjanuni: Theben Nr. 74, AV 19*. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Daressy, G. 1901 Rapport sur la trouvaille de 271111. *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 2: 1-13.
- Davis, T. M. 1907 *Tomb of Iouiya and Touiyu, The finding of the tomb*. London, Archibald Constable and Co., Ltd.
- Guidotti, M. C. 1991 *Museo Egizio di Firenze: Vasi dall'Epoca Protodinastica al Nuovo Regno*. Roma, Istituto poligrafico e Zecca dello Stato, Libreria dello Stato.
- Holthoer, R. 1977 *New Kingdom Pharaonic Sites, The Pottery*, The Scandinavian Joint Expedition to Sudanese Nubia Vol. 5:1. Lund, Scandinavian University Books.
- Kozloff, A.P. 1990 Theban Tomb Paintings from the Reign of Amenhotep III: Problems in Iconography and Chronology. In L. M. Berman (ed.), *The Art of Amenhotep III: Art Historical Analysis*, 55-64, Cleveland, Cleveland Museum of Art.
- Lansing, A. 1941 Two Imitation Stone Vases of the XVIII Dynasty. *Bulletin of the Metropolitan Museum of Art* 36: 140-141.
- Mostafa, M. F. 1995 *Das Grab des Neferhotep und des Meh (TT257), Theben VIII*. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Nagel, G. 1938 *La Céramique du Nouvel Empire à Deir el Médineh*. Le Caire, Institut français d'archéologie orientale du Caire.
- Nordström, A. and J. Bourriau 1993 Ceramic Technology: Clays and Fabrics. In Do. Arnold and J. Bourriau (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, 168-182. Mainz am Rhein, Verlag Philipp von Zabern.
- Quibell, J. E. 1908 *Tomb of Yuaa and Thuiu, Catalogue Général du Musée du Caire 51001-51191*. Le Caire, Institut français d'archéologie orientale du Caire.
- Rhind, A. H. 1862 *Thebes: Its tombs and their tenants, ancient and present, including a record of excavations in the Necropolis*. London, Longman, Green, Longman, and Roberts.
- Rose, P. 1996 The Pottery. In N. Strudwick, *The Tombs of Amenhotep, Khnumose, and Amenmose at Thebes (Nos. 294, 253 and 254)*, 166-181. Oxford, The Griffith Institute.
- Rose, P. 2003 Ceramic from New Kingdom tombs: recording and beyond. In N. Strudwick and J. H. Taylor (eds.), *The Theban Necropolis: Past, Present and Future*, 202-209. London, The British Museum Press.
- Serpico, M. 2000 Resins, amber and bitumen. In P. T. Nicholson and I. Shaw (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, 430-474. Cambridge, Cambridge University Press.
- Wiese, A. 2004 Unguent Jar of Lady Siamun. In A. Wiese and A. Brodbeck (eds.), *Tutankhamun, The Golden Beyond: Tomb Treasures from the Valley of the Kings*, 220-223. Basel, Antikenmuseum Basel und Sammlung Ludwig.
- 高橋寿光 2006 「カイロ・エジプト博物館所蔵ディーラ・アル＝マディーナ出土の彩文土器について」『エジプト学研究』第14号 31-39頁。
- 早稲田大学エジプト学研究所編 2007 『ルクソール西岸岩窟墓〔III〕—第333号墓、A.21号墓、A.24号墓、W-4(Nr.-127-)号墓—』Akht Press。

高橋 寿光

日本学術振興会特別研究員

Kazumitsu TAKAHASHI

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science